

「親子で聴く戦争のはなし」

2016年08月13日

山中恒氏が近くの金井幼稚園で講演するから聞きに来ないかというメールが来た。早速、出かけた。山中氏は児童文学者として多くの少年少女向けの本を書いている。私が山中氏を知ったのは、1974年に著した『ボクラ少国民』を深い感銘をもって読んだ時である。少国民とはアジア・太平洋戦争時代、銃後の子どもを指した言葉で、年少の皇国臣民を意味する。『ボクラ少国民』は絶対天皇制の下で子どもも天皇のために死ぬことを強要された歴史を克明に報告し、目を開かされた本であった。

妹尾河童氏の『少年H』はベストセラーになり、映画化もされた。妹尾氏はクリスチャンホームで育った少年の頃の思い出を書いている。クリスチャンホームだから、当時の一般の人々とは違う価値観を持ち、それが興味深い物語になっていた。しかし、妹尾氏は戦時中のことを正確には記憶していない。山中氏は『間違いだらけの少年H』を書いている。歴史家として史実を正確に捉える山中氏は『少年H』の時代考証の不備を指摘したのである。生真面目な人であると思った。

山中氏の講演が聞けると思い、喜んで出かけた。なぜ幼稚園で山中氏を招いて講演会をするのだろうかと思った。「金井幼稚園OBタイヤブランコーズ」という父母会が、大人と子どもが一緒になって「親子で聴く戦争のはなし」を継続的に催しているということであった。父母会の中に山中氏と親しい人がいて、山中氏を講師に招いたのだと知った。20畳くらいの畳の部屋に、若いお父さん、お母さんと乳飲み子から中学生くらいまでの子どもが入り切れないほど集まって来た。これまで、福島の被災者の話を聞いたり、助産婦さんから「いのち」の大切さの話を聞いたりしたそうである。昨年、長崎で爆した88歳の人の話を聞いた。地域に根差した若い人々が子どもたちを交え、このような会が持たれていることは素晴らしいと感激した。私が加わっている「九条の会」は若い人々を仲間に加えていこうと、努力はしているが、残念ながら、実績は上がっていない。

山中氏の講演も興味深いものであった。生真面目な人であると思っていたが、気さくな人で、司会者のお母さんと掛け合いをしながら、子どもに分かるように、戦時中の「慰問袋」「千人針」「出征旗」「国防夫人がかけていたタスキ」「雑嚢入れ」「勲章」などの現物を見せながら、戦争に駆り出されていった当時の状況を説明した。空腹で物資がなく苦しかった生活を縷々語られた。子どもたちは興味津々に聴いていた。

山中氏は中学2年生の時、敗戦を迎えたが、戦時中は軍国少年であった。上官から殴られずにすむ空軍将校になろうと思っていた。母親は戦争に行かずにすむ、武器製造の技師になることを勧めた。天皇の玉音放送は理解できず、人から聞いて敗戦を知り、申し訳なく、死んで天皇にお詫びをしようと思った。天皇への忠誠を強要した大人たちは自決するだろう、それを見てから死のうと思ったが、誰も自決しなかった。手のひらを返して、民主化を喜ぶ大人たちは信用できないと思った。教えられてきた少国民の価値観がひっくり返ったのである。この時、権力者の言動に対し、心底不信感を持った。見ることに、聞くことに対して、本当にそうなのかと自分の頭で考えることの大切さを力説された。憲法を始めて読んだ時、もう戦争はしないのだと嬉しさがこみ上げた。憲法によって、戦後の平和を作り上げてきた。「日本国憲法」と井上ひさし氏の「こどもに伝える日本国憲法」と自民党の「憲法改正草案」の印刷物を、読み比べて見なさいと渡された。最後に、岐路に立っている今、歴史に学び、社会を育てる賢さが未来につながる希望になると結んでいた。